

Grand Cross

FOR ADULT ONLY

天使の翼が折れた

Angel's **WING** Broke OFF



天使の翼が折れた

「直井くん。ああいうことは止めて欲しい」
「会長……何のことですか？」

天使——立華かなでは、副会長である直井文人が模範的な人間になるだろうと想像していた。

だが、それが過ちだということに気付くのは、もう少し時間が掛かる。

「私のお願……分らない？」

「そうですね。分かりませんね」

「そう」

かなでは黙った。

“死んだ世界戦線”の連中がやっている反模範的行動に比べれば全然ました。

それに直井がいるからこそ、自分の負担が減っているのも事実だ。

これから先も文人は自分の傍らで秩序と規範を維持してくれる……そうかなでは思っていた。

「そういうえば一般生徒から、戦線の連中が良からぬことをしていると報告がありましたよ」

「……私、聞いてない」

「僕に直に話してきたのでしよう。生徒会の方にはまだ報告してないので」

「……私が行きます」

「また会長自らですか？ そんなに彼らに拘る理由は何ですか？」

「……」

かなでも答えられないことが多い。

ただ、かなでにとってあの“死んだ世界戦線”の人間たちは文人のように武力で叩き潰していい相手だ

とは思っていないのだ。

それが自分の記憶に関わることだとぼんやり感じている。だからこそ、かなでは“死んだ世界戦線”の連中とやり合う時、自分の身体を張っているのだ。

「会長のしていることはイマイチ分かりませんね。僕には非効率的だと感じられます」

「そう……あなたにはそう感じられるのね」

「はい。あなたの部下として苦言を呈しています」

「部下……違うわ。あなたもひとりの“人間”部下とかそういうのは、好きじゃない」

「そうですね。やはり会長は甘いですね」

「……甘くても構わない」

かなでは、文人を置いて出て行くこうとする。

文人は動かず後ろから声を掛ける。

「場所、分かっているのですか？」

一瞬かなでが止まった。

「……」

「メール、送って」

「了解……会長どの」

文人は口の端をきゅつと歪めた。

そして、自分の心の中に溜まっているものを吐き出す。

「——神になるのに、あなたは邪魔なんですよ。生徒会長」

まともに名前を呼んだのは多分これが初めてだ。

その名前を口にするだけでゾクゾクとした憎悪が沸き上がってくる。

自分が神に近づくためには、どうしたって天使——かなでが邪魔だった。

あの女のお陰で自分の計画が先に進まない。時計の針を自らの手で進めることはできる、そう

言って神に挑戦した男がいたことを文人は覚えてい

る。

「……」

◆ ◆ ◆

文人のメールの通りに学校の傍にうち捨てられた

部室にやってきたかなで。

周囲を強化したセンサーで確認する。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」
「……ここは立入禁止区域です」

うち捨てられた部室は老朽化のため危険であることから、先月使用禁止と定められていた。

「死んだ世界戦線」の連中がたむろするのは、校長室であってここでは無いのをかなでは知っている。だが「戦線」の連中が頼りにしているという「ギルド」と呼ばれる奴らがここにいてもおかしくなかった。

かなではハンドソニックを構える。

「生徒会長」

後ろを取られた。

でも、振り返ればそこには文人が立っていた。

「……直井くん。どうしたの？」

「応援に来たんですよ」

「応援？」

「ええ……あなたの活動に幸あれ、とね」

文人はかなでの両肩を押さえ、目を覗き込んだ。

その目が怪しく光る。

「……直井くん」

「——会長、あなたは疲れている。休んだ方がいい」

「……疲れている……休む」

「——そう。そのためには僕の言うことを聞いておいた方がいい」

「……直井くんのこと……聞く」

「——いいぞ、会長。そのまま僕の言いなりになってくれれば、あなたの悩みは小さくなる」

「……私の……悩み……小さくなる」
「——そう。悩みは小さくなる」

本当は悩みは無くなる、と言いたい。

「……ただこの世界……死後の世界では無念が取り除かれれば成仏し、消えてしまう。」

つまり、悩みも無念も残って貰わなくては困るのだ。

「——……さあ、会長。いや、かなでさん。あなたは僕の言うとおりに動く。そうすればあなたの悩み、ストレスは軽減される」

「……軽減……される」

「——あなたも疲れているのでしょうか？ 僕だったらあなたの役割はしたくない。自分の手で多くの仲間を成仏させていく」

「——それがストレスでなくて何なのですか？」

「……ストレス……違う……私は、ただ、みんなと一緒に……いたいだけ……」

「——だったら僕の言うことを聞いてください。あなたの辛さを軽くするのです」

「……辛い……軽くする……それは……して、欲しい」

そうだろうとも。

誰だって自分の正しさを友達を失いたいとは思っていない。

だが、今のかなでの立場であれば必ず自分の友達を失っていく。

それが分かっているからあの何の役にも立たない「死んだ世界戦線」に依存している……そう文人は考えている。

「——さあ……僕の目をもっと覗き込んで」
「……は……はい」

微かに抵抗の色が見えた。

だが、文人はそれを力で押しつぶす。すぐになでの目から力が失われる。

これで自分の言いなり人形が誕生したわけだ。

「……かなでさん。そのまま立っててくれますか？」

「……はい」

かなでは文人から離れて立っている。

まだ、あの無粋な武器が出っぱなしになっている。

「その危なっかしいもの、しまってください」

「……ハンドソニック。解除」

音を立てて光の剣は消えた。

文人はこれから先のことを考え、催眠術でのキーワードを設定する。

「——そうですね。「ロックは死んだ」と言ったら僕と行ってきたことは全て記憶から消されます」

「……記憶……消される」

「——あと「戦争は終わるよ。君が望むなら」といったら催眠状態は解除されます。ただ、僕が指を鳴らしたら……元に戻るだけで」

「……解除……そして、元に戻る」

「——まあ、これぐらいでいいでしょうか？ さて……じゃあ、やってもらいましょうか。かなでさん」

文人は悪い笑みを浮かべながら、かなでの前にしゃがみ込んだ。

そしてこう命じる。

「かなでさん、スカートをたくし上げなさい」

「……はい」

かなでは黙ってスカートをたくし上げた。

文人はそのまま股間に食らいつくようにして見つめる。

「……悪いことはもつとこうやって早くやっておくべきでしたね」

「悪いこと……しては……ダメ……」

「悪いことをしないとこの世界には意志を持って残れない。それはあなただつて分かっているはずだ」

「……ダメ」

「いいじゃないですか。これからあなたも『悪い娘』になるんですから」

そう言つて文人はかなでの股間をぐつと弄り回していく。

かなではその強い刺激のたびに身体をびくつかせ、反応してしまう。

「おや……生徒会長ともあろう人がパンツの上から性器を撈られて興奮しているんですか。いやらしいですね」

「それは……」

「いえ、いいんですよ。それが生理現象として自然なんですから。さて……もう少し弄りましようかね」

「や、やめて……」

かなでは抵抗しようと動く。

だけど、文人の言葉がかなでを抑える。

「——あなたはそのままオマンコを弄られるのを望んでいる。だからこのまま弄り続けられたい。そうですね」

「……いい、弄られたい……弄り続けられたい……」

「くくく……さて、どうですかね」

文人はそのままかなでのスリットを擦っていく。

途端、文人は興奮を感じ取った。

外見年齢に従つた色気のないパンツだが、性器自体は大人びていた。それを指の感触で理解したのだ。

「うん……なかなか男好きのするいやらしい身体ですね。このままもう少し弄つてあげますよ」

「あ……ああ……お、お願いします……んっ♥」

かなでの口から意図しない声が漏れる。

それを満足そうに文人は受け入れた。

自分の催眠術は完璧だ。例えば、神に近い天使であるかなでであっても支配することはできた。

だったら、神さえも自分は支配できる、そう確信していた。

だがそのためには、こうやってかなでを辱める必要がある。

“死んだ世界戦線”の連中とやっていることは変わりないと思うが、手段を持っている自分の方が遙かに先に進んでいると、文人は思っている。

「……あ、あの……さ、触らないの……」

「触りますよ。ええ、触りますとも。ふふふ……さあ、じつとして下さい」

文人はそのままパンツを割れ目に食い込ませてい

く。

食い込ませるたびに、かなでの身体がびくんっ♥

びくんっ♥ と震え、文人を楽しませる。

あの大人しく清楚な生徒会長が自分の指で辱められてセックスの興奮を感じているかと思うと、文人もまた興奮を高めるのだった。

「はあ……あああ……さ、さ、触らない……で……」

「触つて欲しいんでしょう？ 違いますか？」

「そう、触つて……欲しい……」

かなでの中では混乱が広がっている。

自分が文人に辱められてるということへの嫌悪。純潔を守りたいという願望。ともかく今行われているおぞましい行為を早く止めて欲しいという気持ち。

何もかもが本当だった。

だけど、それとは正反対の気持ちが競り勝つていくという事実。

もつと自分の性器を辱めて欲しい。

もつといやらしいことをして欲しい。

もつともつとこれで気持ちよくして欲しい……。そんなのが駆けめぐっているのだった。

「ふふふ……そうですか。もつと触つて欲しいですか。じゃあ、もう少しパンツの上からの検査を続けますようね」

「……はい」

かなではほつとした。

ギリギリの行為で双方の気持ちが納得できるラインがそれだったからだ。

パンツの上からの愛撫であれば耐えられる……そう感じている自分が嫌でもあったが、今はそれしか



ないのだ。

「なかなか可愛いパンツですね。色気が無い。ですが、こうやってオマンコに食い込ませると……途端にいやらしくなる」

「……だ、だめ……そんなこと、しては、だめ」

「ダメじゃないでしょう？ ここ、固くなってますよ。分かりますか？ クリトリスですよ？」

文人の指がかなでの敏感な場所を叩く。

かなでの腰がびくんっ♥ と震える。

「ここのこんなに気持ちいいなんて……信じられなかった。」

今まで自分の性器を触るなど、身体を洗う以外でやったことは無かったのだ。

そして、今これを快楽と感じている自分がとつもなく嫌でもあった。

「くくく……困ってますね。でも、困るのはこれからですよ。もつともつと気持ちよくなりますからね」

「そんな……私は……どうなるの？」

「さあ？ それは僕の知っている範囲じゃないですかね。どうにでもなるんじゃないんですか？」

「もう……やめて……」

「止めませんよ。これから面白いんですから——さあ、かなでさん。あなたはオマンコ弄られるのが好きになりました」

「……お、オマンコ……弄り……好きに……なる」

「——そうです。あなたは生徒会長なのにオマンコ弄られると凄く興奮するいやらしい女に成り下がっているのです」

そうして文人は割れ目に食い込んだパンツに指を

突き立てて責めていく。

かなでの腰がびくんびくんっ♥ と震え、徐々に

愛液が滲み始めていく。

それを嬉しそうに文人はすくい取っていく。

「あはは……スゴイスゴイ。天使といってもオマンコは濡れるんですねっ！ これは参った！ あはは……ほら、気持ちいいんですねっ！」

「うんっ……気持ちいい♥」

かなではここでも混乱した。

さつき文人が言ったのではないか。かなでは性器を弄られるのに興奮するいやらしい女だと。だが、それが元々だったと自覚している自分もいるのだ。

この二つの相反する物が文人の催眠術だという自覚は全くない。文人の催眠術が特殊能力——かなでのハンドソニックと同程度の——であるが故であるう。

かなでは自分と同じよに作られた能力の前に無力であることを体現した。

そして、それが結果的に文人に天使を墮とし、神をも引きずり下ろせるという確信を抱かせたのだ。

「さあ……もつと辱めて上げます。その方が気持ちよくなるでしょうからね」

「は、はい……もつとして下さい♥」

かなでは足を開き文人の指を受け入れる。

スリットに食い込んだ指は敏感な穴の周りを責めて、愛液を吐き出させていく。

かなでは黙ってヴァギナへの愛撫を受け入れていくだけだった。

愛液を吸い込んだクロッチはピチャピチャと文人の指で音を奏でていく。

その小さな音にかなでは興奮し、感じていく。

「あっ♥ ああっ♥ お、音お……」

「ん？ 何かしましたか？ 音がいいんですか？」

「お、音……いやらしい」

「そうですね。いやらしい音ですね。かなでさん、あなたのオマンコから出てる音ですよ。どれだけ感じてるか、分かりますか？」

「わ、分からない……こんなの、初めてだから」

「ははは……生徒会長ともあろう人が、自分の性器を弄って試したことが無いなんて！ あなた、それで一般生徒を導けるつもりですかっ？」

「……」

かなでは分からなかった。

この性欲と一般生徒を導くことに何の関係があるのか。

単に文人がこの世界に自我を持って残るために辱めている……単にそれだけじゃないのか、と。

「違いますよ、かなでさん。あなたがやりたい通りにしてるだけですよ。——普通の生徒を守り、秩序を

高めるためには、欲望を知るべきなのです」

「……欲望を、知る」

「だから……もつといやらしいことをしましょう」

文人はかなでのパンツを下ろした。

かなでの身体がびくんっ！ と硬直する。



「かなでさん、いいことを教えてあげましょう。僕は女性の性器を見るのが、これが初めてなのです」

「……そう」

「だから僕を導くつもりでお願いしますね」

「……分かったわ」

文人は嘘は言っていない。

女性の身体に興味が無いのだ。

あの日……大切な自分を殺した日……あれから文人は性的不能者になった。

不能の人間が女性の身体に興味を持って沸き上がるのはもどかしい興奮だけ。

だから、文人は暴力に傾倒した。自分のルックスと催眠術を使えば女生徒を凌辱するなど訳無いのだが、それをしなかったのは、できなかったからなのだ。

「残念ですよ、本当なら僕の股間のイチモツはとつくにガチガチに勃起してる筈なんですがね。何も反応してないんですよ」

「……そう。それは、困る、ことなの？」

「ええ。男としては最低で困ることですよ。でも、かなでさんのオマンコを見ているウチに直るかも知れませんからね。もっと見せてくださいよ、天使のオマンコを」

かなでは否定したかった。自分は天使でも何でもない、と。

でも、今自分が天使を否定すれば、この世界の秩序は崩壊し、望んで成仏したい人間を消すことではなくなる。

そのために自分がいる。それがかなでの強い意志だった……そのはずだった。

だが、今、自分の純潔を凌辱されていくにつれてかなでは自分の中に塗炭の苦しみにも似た気分が広がっていくのを感じる。

その苦しみの片方には間違いなく、天使である自分の役割があった。

「へえ……かなでさんのオマンコ、毛が生えてないんですね。天使ってのはオマンコの毛を剃ってるんですかね？」

「……剃る？ どうして？」

「ああつ！ これは失礼！ かなでさんはパイパンなんですわっ！ 毛が生えないっ！ そうですかっ！」

「ばい……ばん……」

「いえいえ！ いいですよっ！ そうですよ、天使には下品な毛など生えませんかっ！ あははははは……」

文人の言葉は間違いなくかなでを傷付けていた。

だが、かなでは何に傷付いているのか、分かっていないのだ。

文人の言葉が侮蔑を含んでいるのは確かなのだけれど、知識の足りないかなでは分かっていない。

それでも自分が辱められ、傷付けられていることは理解できている。

この妙な状況にまたかなでは混乱するしかなかったのだ。

「……私、変なの？」

「いえいえ。全然変じゃありませんよ。あなたにとっては普通のことです。そして身体的な特徴はそんなに問題ではない」

「……そう」

「ええ……ただ、僕が性的に問題がなかったら今頃かなでさんはレイプされていたでしょう。それぐらいいやらしい身体をしている、というだけです」

というだけ……それにはかなでは怖気を感じた。自分がまともだと思っただから、生徒会長を、天使役を引き受けた部分はあった。

だが今文人が言ったとおりだとすれば、自分にはその資格がないかも知れない。

異性を挑発するような肉体をしているとは自分では思っただことも無かった。

「ふふふ……無知なかなでさんに自分の身体のいやらしさ、教えてあげますよ」

「……う……や、やめて」

「ダメです。あなたは拒否できない。——何故ならあなたは自分の性器を嬲られるのが好きだからだ」

「す、好き……私の性器が……嬲られるのが」

かなでの心の中に重い物がのしかかる。

理性では拒絶している筈の物だったのに。

かなでは必死で文人のやろうとしていることを拒否したかった。

だが、身体が動かない。

自分はこういうことをされて喜んで快楽を感じているいやらしい女なのだ——その想いが強いのだ。

「さあ……開きますよ」

文人の指がかなでのヴァギナを開く。

大陰唇を開くと、にちゃあつ♥ といやらしい音を立てて、まだ未熟なヴァギナが口を開いた。

未熟なヴァギナは、小陰唇の発達が遅れ、大陰唇のぷっくりとした筋が際だっていた。



それを更に押し広げるとやつとピンク色のぴらぴらした粘膜組織が剥き出しになる。

「……こんなに奥まったところにあるとは、かなでさんのオマンコはガキマンコですね」

「……そ、それは、どういう意味？」

「男をそそらせているってことですよ」

文人は変な興奮を覚える。

生徒会長であるかなででは少なくとも二年生。十分に女性として機能している苦だと思つた。

だがどうだろう、この性器の未熟っぷりは、まるで思春期を迎えたばかりの少女じゃないか。

文人にはロリコンの気は無い。

しかし、背徳的な行為に新しい興奮を感じているのはまた確かな事実だった。

「さて……膣口をこじ開けましょうね。処女膜を見させて貰いますよ」

「……そんな……や、やめて」

かなででは身体を硬くした。

だが文人の言葉に言いなりになつていゝる身体は言葉ばかりの抵抗を見せるだけだった。

ただ大人しく文人の言葉に従う身体をかなででは戸惑いをもって受け止めるしかできない。

「あ……あああ、ああああ……そんなに開かれる、だ、だめ……」

「くくく……ほら、やつと小陰唇が開きましたよ。ここまで開かないとオマンコそのものが見えないとは。なんていやらしい穴でしょうね」

「くう……はあっ♥ や、やめ……ああっ！ あああ

あつ！ い、痛いっ！」

「痛いですか？ そうですか。処女膜がびつちりと貼っているからじゃないですか？」

「ふふふ……面白いですよ、女の子のオマンコというのは」

文人は本気で言つていた。

このように狭い穴から子供が産み落とされる……そう考えると神秘的でさえあつた。

そして、勃起こそしないが自分が確かにセックスの衝動と興奮を感じているのも理解していた。

これで勃起していればセックスへの衝動を抑えられなくなつていただろう。

それぐらい女性器への興奮が高まっているのを感じていた。

「ああ……これをメチャメチャにしたいですね。ですが僕にはできない。だから、代わりを用意するわけですが……」

「……代わり？」

「はい。アソコに行きましょう」

文人にエスコートされ、男たちのいるところへとやってくるかなで。

テーブルの上には巨大な男性器を模したオモチヤが置かれていた。

この意味するところは一つだけだ。

「かなでさんは処女ですね。ああ言わなくても結構ですよ。あなたのように清らかな天使が未通娘以外のはず無いですからね」

「……」

「ですが、これ以上の快楽は処女膜あつては望めない

ことです。つまりあなたに覚悟を見せて欲しいのですよ」

「……覚悟」

「——あなたが望んでいる通り、学園に平穏と秩序を取り戻したかったら僕の言うとおりにするしかない」

「……それは」

「——そしてあなたが欲しがっている本当の快楽を得ることもできるのですよ」

文人は催眠術を念のため使つた。

もう使うまでもないほどかなでのヴァギナは感じている。事実立っているだけなのに剥き出しの割れ目からは愛液が溢れ、内股を濡らしている。

文人の乱暴ではあるが愛撫によつてかなでの性器はこれまで感じたことの無い快楽にうずいていゝのは間違いない。

本当の快楽、という言葉聞いた時、かなでの喉がぐくりといやらしい音を立てたのを文人は聞き逃さなかつた。

「さあ、かなでさん。どうするのが正解か分かりますか？」

「分かる……」

かなでではテーブルの上に乗る。

そして、自らメリメリと性器の中に異物を入れていこうとする。

だが——

「い、痛い……」

「ふふふ……やはり痛いですか？ でも、大丈夫ですよ。すぐに気持ちよくなりますからね」

「え……」



文人はかなでの股間に触れる。

小陰唇までも指で開いてディルドーに宛がう。

それから指先で優しくクリトリスを愛撫していく。

「ひいっ♥ あっ♥ あひいっ♥ だ、だめえ……

はああっ♥ あああっ♥ き、気持ちいい

「気持ちいいでしょうっ？ そうでしょうっ？ くく

く……女の子の一番気持ちいい場所を弄ってるんで

すからね。クリトリスって言うんですよ」

「く……クリトリス……」

「そうです。くく、もつと弄りますよ」

文人はかなでのクリトリスを包皮ごと撚っていく。

かなでの腰がビクビクと震える。

「あああっ……あああっ♥ あはあああっ♥

はあああああっ♥ き、気持ちいい

「くく……凄いですよ、生徒会長。これをあの下

らない戦争ごっこをしている連中に聞かせてやれば、

あなたを狙うことは止めると思いますかね」

「だ、だめっ……そ、それは、ダメ……」

「どうしてですか？ あの役に立たない連中が大切な

のですか？」

「それは……」

心に引っかかる人がいる。

その人があそこにいるから自分は彼女ら“死んだ

世界戦線”のことを何とかしたいと思っている。

うかも知れない……かなでにはそれが耐えられな

かった。

「そうですね。こだわりですか。それがあなたの未

練って奴ですか」

「……」

「まあいいでしょう。これはここだけの秘密。どうせ

彼らには関係ないですから」

「そう……んっ！ はあっ♥ あああっ♥ き、気持

ちよく……する……」

「そうです。あなたがこのディルドーで処女を散らせ

るようになるまで……くくく」

処女を散らす。

今のかなでにはどうでもいいことだった。

恋愛的な感情は無い。

ただ、自分の心残りを大切にしたい。それだけで

この世界にしがみついているのだ。だから、文人の

暴拳を止められるなら……そう思っているかなで。

その一方で、少女の心は悲鳴を上げている。催眠

術で押さえつけられているかなでの心。

けっしてこういうことを望んでいないかなでは、

もう止めて欲しいと懇願しているのだ。

だが、それは今のかなでに届いても顧みられず、

催眠術を掛けた文人には届きもしない。

言われて気付いた。

そう。さっきたむろしていた生徒たち。

彼らは大人しくかなでのまわりを取り囲み、この

いやらしいシヨウを見学しているのだった。

かなでは思わず腰を引きそうになる。

「……ダメですよ、生徒会長。あなたは会長らしく、

男子生徒を導かなくては……そう、女としての機能

を見せて、性教育するんですよ」

「……性教育」

「そうです。さあ、見せてあげてくださいよ」

催眠を更にかける。

本来ならひとりにつ、二つぐらいの催眠が適当

だ。だが、ここまで来たなら文人としては自分の限界

を試しておきたかった。

——いずれは神になる。

その願望を実現するためにはどうしたって自分の

能力限界を知っておく必要があるのだ。

「さあ……かなでさん。もうあなたのオマンコは十分

濡れています。一気に、ディルドーを味わってくだ

さい」

「は、はい……」

かなでは腰を一気に落とした。

どぬうっ♥ という感触と共にディルドーが一気に

に子宮目がけて突き進んでいく。

凄まじい違和感、異物感にかなでは吐きそうにな

人に捕まれた跡。何か固い物が食い込んだ跡。そんなのばかりだ。

何よりもおかしく、そして取ずかしいのは股間、性器の辺りがジンジンとしていることだった。

トイレに入った後、血が滲んでいることも少なくともなかった。

「……何が起こってるの」

トイレから出てきたかなではそう呟いた。

「……僕の催眠術は本当に良く効きますね」

「……直井くん？」

トイレ傍の壁に寄りかかってかなでに話しかける文人。かなでは文人の言葉が分かっていなかった。

「そうそう。会長、また情報ですよ。旧部室に男子生徒たちが集まっています」

「そう。では、行きましょう」

「はい……」

そうしてかなでは今日も何の疑問も抱かず文人の言葉に従ってその建物に向かう。

向かった先では男子生徒たちが待ちかまえていた。

「……ここにいてはいけない。みんな、授業に戻りましょう」

「ええ。それが正解ですよ、かなでさん」

「……直井くん？」

文人の言葉が理解できない。自分は授業をさぼっている生徒に向けて言ったのだ。

何に正解があるというのか？

「——戦争は終わるよ。君が望むなら」

——パチンツ！ 文人の指が鳴った。

途端、かなでの身体が震える。

「あ……ああ……や、やだ……だ、だめえ……あああ

あ……そ、そんな……そんなあ……」

「くくくく……何回見てもいいですね、会長のフラッシュバックは」

「き、昨日、そんなこと……して、ない」

「ダメですよ。僕が上書きした記憶、消してしまった記憶が真実じゃないのは、あなたが一番よく分かっている筈ですよ」

「あ……あ……ああ……」

「さあ、今日は素直になる催眠術を掛けてあげます。みんな待つてるんですよ」

男たちの荒い息づかいが聞こえる。

かなでは怖気を感じ、身体を震わせた。

自分の身体に起こっていたことを全て理解したのだ。いや、思い出したのだ。

「あ……い、いやあ……」

「——さあ、今日は素直に自分の気持ちいいところを晒して遊んで貰いますよ。さあ、どこを弄って欲しいですか？」

「……お、おま、オマンコ」

「——じゃあ、みんなによく見て貰いましょう。みんなに楽しんで貰いましょう」

「……はい」

かなでは、大人しくなった。

理性が狂った悲鳴を上げているが遠いところで吠えているようにしか聞こえない。

「さて……どうしましょうかね？ 取り合えずパンツを脱いで貰いますか」

「……はい」

かなでは文人の言いなりになってパンツを脱ぐ。

真新しいパンツには染みは着いていない。

まだ綺麗な身体のまま、この凌辱を受けることになるのだ。

「さあ……かなでさん。みんなに見せてくださいよ。あなたのオマンコを」

「……はい」

かなではテーブルの上に腰掛けた。

そう。このテーブルは何度も何度もいやらしいことに使われている。

この上に座ったりするたび、かなでは酷い凌辱を受ける。

それを分かってまた腰掛ける。それがとても屈辱的で辛いことだ。

なのに、今の自分はそれを喜んでいる。

文人の能力のせい？ いや、それだけではないことをかなでは知っている。

そう最低なことに自分がこの快楽に負けていることを知っているのだ。

あの脳を灼く激しい刺激にかなでは負けている。できることならこの快楽に自らを委ね続けることができるば……

理性の悲鳴はずっとずっと響いている。かなでに



はそれを無視することはできなかつた。

だが、身体はいうことをきかない。ただ虚ろな笑みを浮かべて、かなでは性器を晒す。

「み、皆さん、ご、ご覧下さい。これが女性器……オマンコです。よく見てこれからのことに備えて下さい」

文人に教えられた恥ずかしい言葉を機械のように口にするかなで。

だが催眠術でコントロールされている生徒には関係ない話だった。彼らは素直にこの生徒会長の痴態に喜んでいる。

「マジで会長がオマンコ広げてるぜ」

「噂は本当だったなっ！」

「おらっ、こっち向いて笑えよ」

男子生徒たちの獣同然の要求にかなでは応える。

内心は大変怖く、今すぐにでも逃げ出したい……そう思っている。

だが、身体の記憶は別だ。

彼らに乱暴に扱われて興奮は加速する一方だった。それをまた味わいたい……そうかなでは思っていた。

「で、では、ご覧下さい……わ、私の、かなでのいやしいところを見て下さい」

かなではそう言って自分の陰唇を開く。

すぐに粘膜が剥き出しになって、くちやあ♥といやらしい音が漏れ出る。

粘液が小さな陰唇の内側に溜まっているのは、赤く色づいた粘膜の充血具合から容易に想像ができた。

だが、かなではそこに触れない。

男たちが望んでいることが分かっているからだ。焦らしているわけではない。かなでの理性がせめぎあいの抵抗とばかりにしているだけなのだ。

「くくく……かなでさん。どうしたんですか。オマンコの穴を見せるんでしょう？」

「……わ、分かっている」

「じゃあどうして小陰唇を開かないんです？ 確かに大陰唇をこじ開けるのはビジュアル的には大変いやらしい姿ですが……みんなが望んでいるのは違いますよね？」

「……はい」

文人の言葉に抵抗できない。

あの声を聞くとその通りに行動しなくては……と身体が動いてしまうのだ。

「あ、穴を……わ、私の穴を見せます。ご、ご覧下さい……」

かなでは小陰唇に指を添え、花びらを開く。

まだ未成熟な性器が開かれていく。男たちは固唾を飲んでそれを見守る。

「あ……♥」

かなでの小さな口から甘い声が漏れる。

開ききった陰唇の内側、膣口からとろおっ♥と愛液が溢れ出てくる。

その感触にかなでは思わず甘い声を漏らしたのだった。

「おお……汁が出てきたぞ！」

「マジかっ！ すげっ！」

「もつと見えるようにしろよっ」

男子生徒たちの興奮がかなでの恐怖心を煽る。

だが催眠がその恐怖心を押しつぶし、逆に男子たちを煽るように動く。

「み、見て……下さい♥ か、かなでの、オマンコ……ほら、これでもつとよく見えますか？」

かなでは腰を突き出して陰部を晒す。

男子たちは食い入るようになかなでの股間に群がっていく。

鼻息さえも感じられるほど近い距離にかなでは身体を震わせる。

怖気、そしてこれから起こる陵辱。そして快楽。

すべてが自分の中で起こるのだ、と思うと狂った興がせり上がってきた。

「ああ……はあ……ほ、ほら、これで、これで全部見えますか？ かなでのオマンコ全部見えますか？」

「ああ……見えるぜ。くくく……いいオマンコしてるじゃねえか？」

「は、はい……ありがとうございます」

「じゃあ、もつとオマンコを弄って俺たちを楽しませてくれよ」

「は、はい……」

かなではヴァギナに指を添えて、オナニーを始める。

身体がびくん♥ びくん♥ と震える。

身体の脈動に合わせるように愛液がどぶうっ♥

と膣口から溢れ出てくる。

その感触を怖気と共に受け入れるかなで。

だが、手は止まらない。

そのまま手が動き続け、自分の身体に快楽をもたらしていく。

「はあ……あああつ♥ くう……ふうっ♥ んんっ

……はあつ♥ き、気持ちいい♥」

「くくく……気持ちいいってさ。言わなくても分かる

ゼオマンコがビクビクしてるからな」

「そうだな。愛液がダラダラ出てきてるからな」

「おら、クリトリスを剥いて見せろ」

「は、はい……分かりました」

かなでは言われるままに陰核の包皮を剥いて陰核そのものを剥き出しにした。

そのまま指で擦ると激しい快楽がかなでの脳を灼く。

「ああああつ♥ ひああああつ♥ ああああああ

あああああ……」

「いいですね、かなでさん。もつと皆さんを楽しませ

てあげてくださいよ」

「わ、分かった……」

文人の言葉を受け、かなではお尻を持ち上げて何もかも晒して見せる。

肛門まで晒している自分を何だろうと思っっている理性の自分。

催眠と快楽のせいでおかしくなっている自分。どちらの自分も自分なのだ。

「あ……ああ……も、もつと近寄って見てください」

「よしっ！ どれ……」

「へへへ……会長のオマンコとケツ穴をもつと見させて貰うぜ」

男たちが遂にテーブルの周りに集まる。

すぐにでも手の届く範囲に男たちがいる。

関わって欲しくない。だけど、関わってくれなく

ちや気持ちよくない。

かなでのない交ぜになっている心は、文人には手に取るように分かっていた。

「……さあ、かなでさん。もつとオナニーして見せて下さい。あれじゃ足りませんよ」

「はい……」

かなではお尻側から手を添えて、ぐつと膣口を剥き出すように広げていく。

その状態で片手はクリトリスを弄っていく。

「ひあああつ♥ あひいっ♥ み、見え、見えます

かっ？ 見えてますかあつ？」

「ああ……見えてるよ、会長」

「すげえ、こんな格好でオナニーかよ。大したもんだぜ」

「マンコ穴がセリ上がって中が見えるぞっ」

クリトリスの刺激に脈動して、膣内が迫り出すのはかなでも感じてている。

そして、迫り出される膣内のせいで愛液がどぶうっ♥ と溢れるのも感じるのだ。

「はあああつ♥ ああああつ♥ き、気持ちいい……私い、オナニーでこんなに感じてるうっ♥」

「もつとだっ！ もつとしてイッてみせろよっ」

「そうだ。イッたら気持ちよくしてやるよ、会長」

「へへへ……楽しみだな」

それは文人も楽しみだった。

催眠術で支配下に置いてある生徒たちは文人のペニス代わりだった。

性の興奮は感じていなくても勃起しない役立た

ずの男根。それは自分で奪ってしまった大切なもの裏表だ。

それを分かっているが、思い出すとイライラが募る。そのイライラはかなでにぶつけられる物だ。

「今日はオモチャを持ってきました。これで生徒会長を楽しませてあげてください」

「へへへ……さすが、副会長。分かるじゃないか」

「こりゃ今日のセックスはますます楽しめそうだな」

かなではテーブルの上に置かれるいやらしいオモチャの類に身体を硬くする。

その一方でやはり快楽を知っている自分は激しく興奮し、それを使って責め立てて欲しいと願うのだった。

「あつ……あはあつ♥ はあああつ♥ ああああつ♥

い、い、イクっ……イッちゃうっ♥」

かなでは身体をぐつと硬くした。

そして、開ききったヴァギナから愛液がびゅーつと噴き出してしまふ。

「おおっ！ イッた！ イッたぞっ！」

「すげえっ！ オマンコから精液出るみたいに

びゅーって出るのかよっ!」

「小便じゃ、なさそうだな。へへへ……会長のオマンコは随分といやらしいなあっ!」

「あ……あああ……いい、イッた……イッたから……ゆ、許して……」

「何を許せていうんですか? これから楽しい目に遭うのに……?」

文人のせせら笑いが視線から感じられる。

かなでは炎死に抵抗しようとした。イッた時だけ、どうにか催眠状態の身体と理性がまとまる。しかし、その時間はそんなに長くない。

「無駄ですよ、かなでさん。さあ、みんな。かなでさんを楽しませてやってくれ」

「待ってましたっ!」

男たちはかなでの身体に群がった。

かなではハンドソニックを構えようとする。

だが男たちの動きの方が早い。絶頂感から感覚の全てがずれている今のかなでは赤ん坊以下だった。

文人への抵抗はまさに螻蛄の斧。車輪に潰されるのは必然である。

「へへへ……いいなあ、オマンコ! いいなあっ!」

「おお……柔らけーっ! おっぱい小さくても柔らかいぜえっ!」

「バカっ! ブラウスの前開けろよっ!」

「面倒だっ! 引きちぎっちゃえ!」

ブチブチブチと音を立ててボタンが飛ぶ。

そしてブラジャーが引きちぎられるように取り去られる。

すぐに小さな乳房に男たちの手が伸びてくる。

大きくて乱暴な手は全く容赦することなく、かなでの乳房を蹂躪し始めた。

「ああ……あはあ! い、痛い……おっぱい、痛い」

「そりゃ痛いだろうよ。全然力加減なんかしてねえんだからよっ!」

「すげえ! すげえっ! 直に触るとますます柔らかくって分かるぜ!」

「へへへ……じゃあ、こつちもそろそろイジメ回すかなっ!」

かなでのヴァギナに指が押し込まれる。

そのままぐつとこじ開けるように動く男の指。気付けばその指の数は増え、容赦なく狭い性器を引き裂こうと動いている。

「ああ……い、痛いっ、そ、そんなに……乱暴に……しないで……」

「分かっているよ、会長。だがおあずけが長いんだよ。少しは我慢しろよ!」

男たちはまったく手加減というのを知らない。

かなでの大切に敏感な場所に群がる手の数はどんどん増えていく。

やがて膣口に指が入っていく。

「ひああああっ! だ、だめえっ……そ、そんなのおつ、だめえっ!」

「うるせえっ! おら、マンコこじ開けてやるっ!」

「俺も手伝うぜっ!」

指が膣口に四本も入って、ぐつと穴を広げていく。

かなでのなかでみちっ! と爆ぜる感触が広がった。

勿論出血があつたわけでも実際に損壊したわけでもない。

ただその感触がかなでの性器に強く感じられただけなのだ。

「くくく……かなでさん。いい格好ですよ。性教育用の標本役を買って出たらどうですか?」

「み……見ないで……」

「僕は見ませんよ。皆さんが見て勉強するんですから……さあ、かなでさんのオマンコの奥の奥まで見てあげて下さい!」

「ひいいいっ! や、やめてえっ!」

かなでの声が空しく響く。

男たちの指が膣口をぐつとこじ開けた。

外気がかなでの内臓を撫でる。その途端、やはり快楽がかなでの脳を駆けめぐっていく。

「へへへ……見えるかな、会長の子宮?」

「バカ。そう簡単に見えるかよ!」

「でもよ、指で触ると意外に簡単に触れるぜ?」

「マジかよっ?」

男たちがかなでのヴァギナにひとりひとり指を挿れていく。

「ほらっ! コリコリしたのがあるだろっ。それが子宮だぜ?」

「へへへ……ここが会長の赤ちゃんの作る場所かあ!」

「おお……たまんねえっ! この真ん中の窪みが子宮口かっ?」



「お、俺にも早く触らせろっ！」

男たちは代わる代わるかなでのヴァギナに指を挿れて、子宮の感触を楽しんでいた。

かなでの性器は完全に玩具にされていったのだ。

「あ……ああ……ああ……」

「どうですか、かなでさん？ いや、何度も聞いてますが何度聞いても楽しいので、聞きますよ。どうですか、ご自分の性器をオモチャにされて？ 嬉しいですか？ 気持ちいいですか？」

「……うう……う、嬉しい……気持ちいい……好きです……こういうのが好きです♡」

「くくく……そうですか！ それはよかったっ！」

文人は満足した。

しかし、かなでも満足していた。

もうこの台詞を何度言ったか分からない。文人のせいとどれだけの男たちに犯されているのか、分かっている。

その間にかなでは自分の中にこれほどまでいやらしい気持ちを維持することができたのだ、と驚いている。

この台詞に偽りが無くなってしまおう……そんな日が来たのだ。

「も……もつとお……き、気持ちいいこと……してくださいっ♡」

「いいぜ、会長。望み通り気持ちよくしてやるからな」

「よし……ケツ！ ケツの穴を楽しもうぜっ！」

「本気かよ？ ケツだぞ？ 幾ら会長だつてクソくら

いはするぞ」

「だからいいんじゃないかっ！ こんなに可愛い天使ちゃんが無コだぜ！」

「かなりキツいなあ……」

「じゃあ、いいよ！ 俺ひとりで楽しむからなっ！」

「待てよ。やらねえ、とは言っていないだろ。お前はケツ掘り最初なっ。後からアナルセックスを楽しむ。それで文句はねえだろ？」

「けっ！ 臆病者どもめ」

「何とでも言えよ。ケツはクソを放る所だつての！」

アナル責めをする男は他の男たちを無視して、指でかなでの肛門を抉る。

だが男の予想と違い、かなでのアヌスは易々と男の指を飲み込んでいった。

「なんだ？」

「あ……ああ……お、お尻いつ、お尻もお……してくれるのですかあ？」

「けっ！ とつくに開発済みかよっ！」

「ああ、すみませんね。会長は貪欲な人ですから。随分と身体中がこなれてますよ」

「けけけ……残念だったな」

「……ケツ穴がこなれてるならこなれてるなりの楽しみがあるつてのよ！」

男たちは思い思いのオモチャを手にしていった。

血気盛んなアナル責めをしたい男子は、ビーズを手にしてかなでのアヌスをこじ開ける。

「あ……ああおおおおおっ♡ お、お尻い、い、苛める……の……ねっ」

「ああ、苛めてやるさ。このでかいビーズでたっぷり

興奮させてやるから覚悟しろ」

「は、はい……お、お願いしますっ♡」

男がぐつとかなでの肛門にアナルビーズを押し込む。

かなでの尻がブルブルと震える。

それは間違いない快楽の震えだった。

肛門を凌辱される感触にかなでは喜んでるのだ。

「へへへ……じゃあ、しばらくみんなに見てもらおうぜ、会長？」

「……まあ、いいんじゃないかな」

「ああ……会長のケツ穴が調教済みならそんなにクソの心配をしなくてもいいんじゃないか？」

「まあ、始末はコイツが付けるだろうし」

アナル責めをする男に任せて、男たちは一旦かなでから離れた。

「じゃあ、たっぷり楽しんでくれよ、会長」

男のアナルビーズがかなでの肛門にめり込んでいく。かなでの調教済みの肛門は、そのビーズを一粒一粒味わうように飲み込んでいった。

「すげえ……こんないやらしいケツ穴は見たことねえぜ」

「ああ……俺はケツに興味は全くねえが、こんないやらしい動きしてるのは初めてだ」

「くう……なかなかいいじゃねえか。ほら、もつと早く責めろよ」

仲間に急かされて男はかなでのアヌスを玩具にしていく。



めり込んだアナルビーズをゆつくりと引つ張り出す。今度は名残惜しそうに肛門がビーズを加えていく。

そして、引きずり出されるたびにかなでは甘い声を漏らすのだった。

「はあああつ……ああおおつ♥ おおおつ♥ おおおつ♥
おおおつ♥ くう……ふうつ♥ おおおおおつ♥
んんんはああおおおつ♥」

「いいなあ……調教済みつてのが残念だけど、ここまでやられてるんだつたら文句の言いようが無いね」

「……も、もつと見せろよ」

「ああ……面白くなってきたぜ」

「何だよ？ みんなケツが汚いつて言つてたじゃないか？」

「会長のケツ穴は別だろつ。ほら、もつとオモチャにしろよ！」

「分かつたよ。焦るな」

男はアナルビーズを激しく出し入れた。

かなでは遂に身体全体で興奮と快楽を貪り始める。

「おおおおおつ♥ おおおおつ……き、気持ちいいつ♥
だ、出し入れえ……す、好きいつ♥」

「へへへ……すげえ、こんな程度で腸液がダラダラ出るようになって……会長のケツ穴はスケベですねえつ！」

「見ろよ、オマンコの方もダラダラさせてるじゃねえかっ！」

「勿体ねつ！ おら、コイツを突つ込んでやんな」

「バイブが手渡される。
アナル責めをしている男はそのバイブをヴァギナ

の中に挿れていく。

「くう……ふうううつ♥ んんつ……はああつ♥
す、凄いい……お、オモチャで……こんなに気持ちよく……なるなんてえ♥」

「ケツ責めが気持ちよすぎて、オマンコまでびくついたか！ 淫乱女めつ！」

「は、はい……か、かなでは……淫乱女……です」

文人に仕込まれた言葉が口から出てくる。

この背徳的な行為に興奮が更に高まっていく。

そして、その興奮に合わせてバイブが動き始める。

「はあああああああああつ！ ああああああああああつ！
あああつ！ お、おま、オマンコおおつ♥」

「すげえつ！ 会長がオマンコつてしか言えてねえつ！」

「そんなに気持ちいいのか」

「くくく……こりゃ、セックスが楽しみになつてくるなつ！」

「まあ……その前に口でも楽しもうじゃないか」

「そうだな。じゃあ、フェラチオをして貰いましょうか、生徒会長？」

かなでの前にペニスが突き出された。

今日初めての男性器を口に含むかなで。

牡の臭い。汗の臭い。小便の臭い。

その全てがかなでの脳を灼いていく。

「好きですねえ、会長？ そんなに男のチンポは美味しいですか？ 僕のも啜えさせたいんですけどね

……残念ですよ」

文人自身は不能故に一度も啜えさせなかった。

文人のペニスの代替物としてこの男たちは存在している。

かなでは何も言わず、ただうつとりと牡の生殖器官をしゃぶつてく。

「んふうつ……じゆるうつ♥ ちゅうつ♥ じゆるうつ♥
るろおつ……ちゅびいつ♥ はあ……んんんつ……ぬちゅうつるろおつ♥」

「おお……すげえ！ 娼婦とやったことは無いけどさ！ これはソープ嬢顔負けの巧さだと思っぜ！」

「ククク……文人童貞だつて自分から告白して、会長のフェラが巧いつてのは、どうかねえ」

「まあ、いいんじゃないか。あの生徒会長が俺たちのチンポを嬉しそうにしゃぶっているつてのが大事なんだからさ」

「まったくだな……」

あのかなでが嬉しそうにペニスをしゃぶっている

……その光景だけで自分たちの性欲が満たされているのも確かだった。

だが、それより先のことができる……そのチャンスを手放すような愚か者はここにひとりもない。

「くう……んっ！ い、イクッ！ 会長、飲んでつ！
俺のザーメン、飲んでつ！」

最初にねじ込んだ男が射精を迎えた。

かなでの口の中に生臭い体液がドクドクと流れ込んできた。

かなではそれを舌で受け止めて、転がして弄ぶ。

それから飲み込んでみせるのだった。

「おお……い、いやらしいなあ。くくく……さあ、俺のも頼むぜ」
「ふあい……」

嬉しそうな男たちを見て文人はつまらないと思っ
た。

既に同じ光景を何度も何度も見ている。

NPCだからか。

同じ人間を巻き込んで、この女を凌辱するのはど
うだろうか。

どのみち時間が経てばこの女よりも自分が強くな
り、この世界の神になる……それは分かり切ってい
ることだった。

ただ、この女を排除すると同時に、自分の存在を
固定化するために必要なのが、世界に対する反逆。
そのためだけにこういうことをしているのは、そ
ろそろ飽きてきたと言うことなのだろうか。

「かなでさん、楽しいですか？」

「……ふあい……楽しいです♥」

「それは良かったです。もっともっと楽しんで下さ
い。そうすれば……僕の目的が早まる、そんな気が
します」

天使である立華かなでが今の位置から落ちること
で自分が支配者になれる可能性は上がる。

問題は何処まで上がれば神、となれるか。

「くうう……お、俺も、出るっ！ す、すげえっ！

気持ちいいっ！」

「んふう……んじゆるううっ♥ ちゅう……ちゅ

るうっ！ ちゅぱあっ！ じゆるるるう……ご
くっ！ ごくっ！」

「へへ……会長、ザーメン美味しいか？」
「……美味しいです♥」

文人の思考は止まった。

だが、それでいいとも考える。

何故なら既に賽は投げた。後は出目がどうあれ、
関係ない。

ただ、結果が出るだけだ。その結果が自分に都合
良いようにしている……それは確かなのだから。

「くう……また勃ってきたぜ」

「おいおい、回復が早いぞ」

「会長がいやらしすぎるからだよっ！ クソッさっさ
とセックスしろよ！」

「待って。他の奴だって会長の口を楽しまたいんだ
からっ！」

争いが始まりそうな男子の仲裁をしなくては……
と文人は動こうとした。

だが、それよりも先になでが男子のペニスを手
で握り、扱いていく。

「お、おい……」

「これで……今は、勘弁して」

「へへ……手扱きか。いいぜ。それでも、会長の手
は小さくて柔らかくて気持ちいいなあ」

「くう……これで、一度に三人は処理されそうだな」
「じゃあ俺は口だな……ほら、美味しいチンポだよ、
会長お」

「ふあい……いただきます♥」

文人はやれやれと思った。

この場はかなでに全て任せよう。

どうやら既に自分はこの行為に飽きている。
後は勝手にすればいいと思い始めた。

「かなでさん、後はご自分の好きにして下さい。僕は
あなたのいない間、生徒会の仕事をこなしています
から」

「……分かったわ」

「ああ……僕の仕事が終わったら迎えに来ますよ。今
日も何もかも元通りになりますからね」

「……ええ」

かなでには分かっている。

文人の催眠術を使われれば今、この瞬間の行為も
何もかも忘れてしまうと。

そして、それには抵抗できないことも。

「じゃあ、皆さん。会長のこと、宜しく頼みましたよ」

「ああ……任せておけ。さあ、会長！ もっともっと
セックスを楽しましなうよっ！」

「はい……お願い、します♥」

文人はそのまま部屋を後にした。

かなでは男たちの中で凌辱され尽くすのだ。

「じゃあそろそろセックスしようか」

「みんな一度にか!？」

「せっかく会長様が手扱きまでしてくれるんだから、
一度にやった方がいいだろっ！」

「そうだそうだっ！ ここに何人いると思ってるんだ
よっ！」

文人が集めた生徒は十二人いた。それが一度に満
足するにはそれぐらいしないと終わらない。

普通にセックスしていたら文字通りかなでの身体がバラバラになるだろう。

「よしっ！俺がケツを犯す。あとは好きに正面から責めなよっ！」

「……相変わらずケツか」

「まあ、その方がいいな。格好としては悪くない。セックスしやすいぞ」

「先にマンコ埋められてケツを渡されるよりはいい。結構まともな判断だ」

「じゃあねえな！じゃあ始めるか！」

かなでのアヌスに亀頭が宛がわれた。

さつきまでオモチャで弄られていたアヌスはドロドロに蕩け、宛がわれたペニスがいきなり奥までめり込んでしまうほどだった。

「おおおおおおっ！お、おし、お尻いつ、は、入ったあっ……あ……おおおおっ……おおおおおとおおおっ♥」

「くううっ！す、すげえっ！か、会長のケツ穴、ドロドロに溶けてるぜ！」

「へへへ……ソイツは良かったな。たっぷり時間をかけただけはあるんじゃないかっ？」

「んんふうう……おおおおおっ♥す、凄いい……お尻があっ、熱いっ♥熱くなるうっ♥」

「まだまだ……これからもっともっと熱くなるぜ」

かなでの尻を持ちながらアヌスを犯している奴が言う。かなでは身体を震わせて興奮を楽しみにする。

「さて……んじゃ、前は俺が埋めさせて貰うか」

「ちっ！運のいい奴めっ」

じゃんけんで最後まで勝った奴のペニスがヴァギナに宛がわれる。

「さあ、会長。こっちも喰らって嬉しがってくださいよっ」

「あ……ああ……はあああっ♥あああああああああああああああっ！」

太いペニスがヴァギナを犯す。

ただでさえ狭いヴァギナはアヌスを犯しているペニスのせいでますます狭くなっていた。

かなでのヴァギナと直腸を隔てる壁がピーンと張りつめていく。

「くう……す、すげえっ！サンドイッチのせい、チンポが潰れちまいそうだ」

「あ、ああこっちもだ。ケツ穴の方がミチミチ言ってるぜっ！」

「会長は身体が小さいからな！でも、俺たちは容赦しないよっ」

「んんっ……し、してえっ♥して下さいっ♥んんっ……ふうううっ♥んんんんっ……はああああああああっ♥」

「いいぜ、たっぷり犯してやるよ」

アヌスとヴァギナのペニスが同時に動く。

かなでは声を出して興奮していく。

「はあ……ああっ♥はああああっ……あああああああああっ♥す、凄いいっ、凄いいっ♥あああああ……お、おかしいっ、気持ちいい……気持ちよくて……おかしくなるうっ♥」

「おかしくなっていていいんだぜ、会長」

「そうそう……コイツもしゃぶってくれ」

「俺のは扱いてっ！」

男たちがかなでの身体に凌辱痕を付けようと群がってくる。

むせかえるような牡の臭いになかなでは震えながら興奮していく。

「んんっ……す、凄いいっ♥好き……はああああっ♥あああああっ♥お、オチンチン……好き……」

「だろうよ！会長様は、チンポ好きの淫乱なんだものなあっ！」

「そ、そう……私い、チンポ好き……せ、セックス、好き……あ……あああああ……くううっ♥ひいひいひいひいひいっ♥」

かなでの中がぐにゅうっ♥と轟く。

セックスの興奮のせいで、内臓が勝手に動いているのだ。

当然、その動きに合わせて愛液もどぴゅうっ♥と漏れ出てしまう。

「ふふふ……すげえっ！会長のオマンコ勝手に動いて……チンポが食いちぎられそうだぜ」

「さっさとイカせて大人しくさせようぜ。まだまだ人数がいるんだからよっ」

「いいかな、会長？ いっぱいザーメン出してよ」

「……は、はい♥せ、精液……いっぱい出して下さい♥」

かなでは左右の手に押し付けられるペニスを扱き、



舌先でペロペロとペニスを舐め回しながら腰を使
ていく。

腰を使うたび、愛液がぴゅっ♥　ぴゅっ♥
と漏れ出て、かなでと男子生徒の股間を濡らしてい
く。

「くう……た、たまんねえっ！　もお、だ、ダメだ
……さ、先にイクぜっ！」

「おう、イケイケっ。代わりが待つてるんだからよ
「くう……いい、イクッ！」

かなでの中でびしゃあっ！　とザーメンが爆ぜる。
かなでは身体をガクガクさせながら膣内射精の感
触を受け止める。

「ふふふ……気持ちよかったぜえ」

「じゃあ、交代だなっ！　って……なんだこれよっ！

汚ねえなっ！」

「しょうがねえだろ。会長のキツキツオマンコが気持
ちよすぎるんだよっ！」

「ちっ！　仕方ねえなっ！」

次の相手はブツブツ文句をいいながらもかなでの
中にペニスをめり込ませた。

かなでの身体がびくんっ！　と震えた。

「おお……狭いなあ。こりゃ確かにさっさとイッても
おかしくないねっ」

「だろ！　すげえんだよ……さあ、動いてくれ。俺も
ケツ穴の方を犯すから」

「くくく……こりゃ、楽しいなっ！」

アヌスとヴァギナのペニスが再びかなでの中を擦

過していく。

かなでの中で粘膜と粘液のハーモニーが溢れる。
ぐちゅぐちゅといういやらしい音は男のせいでは
ない。かなで自身の身体が漏らした体液によって産
まれていく大人のだ。

「はあ……んっ……んんっ♥　き、気持ちいい……い
やらしい音お、気持ちいいっ♥」

「なんだ、テメエのオマンコのグチャグチャ音でよ
がつてるのかっ？　だったらこうしてやるよ！」

ヴァギナにねじ込んだ男子生徒が一気に腰を使っ
た。
途端、アヌスを犯している男子が声を上げる。

「お、おおおっ！　こ、こつちまでえ、き、気持ちよ
くなるだろっ！　おおおっ！　す、すげえっ！」

「おらっ！　会長をもっと犯すんだよっ！」

「わ、分かってる……けど」

「はああっ……わ、私い、き、気持ちいいっ♥　気
持ちいいのお……好きいっ♥」

かなでも、男の腰使いに合わせて動く。

アヌスの男は長い間犯していることもあって絶頂
を迎えてしまった。

「ううう……だ、ダメだっ！　おらっ！　会長おっ、
け、ケツ出しするぜえっ！　たっぷり感じなっ！」

アヌスの中で射精が始まった。
びゅーびゅーと直腸が熱くて粘つくザーメンに犯

されていく。

信じられないほど熱い感触にかなではジワジワと

高みに登らされていく。

やがて、全ての精液がアヌスの中に注がれて、ペ
ニスが引き抜かれる。

途端、今度は注がれたザーメンが排泄感となって
外へと放り出ようとする。

その感触にかなでは一気に絶頂へと駆け上がった。
身体をビクビクと震わせ、絶頂したことを示した。

「くう……はあああああっ♥　い、い、イッちゃ
うう、イッちゃううー　イッちゃうう
ううううううっ♥　くひいいい……はあああああ
ああああっ♥」

かなでは男たちのペニスに囲まれながら絶頂を迎
えた。

同時に溜まっていた小便が一気に噴き出し、全て
を濡らしていった。

男たちは声を上げる。怒声だったり、歓喜だつた
りした。

だが、かなでにはどうでもよかった。
何故なら意識が飛んでしまったからだ。



数日後。

酷い雨――。

この世界でも雨は降るのだ、と文人は思った。
既に多くの血が流れた。

骸、として横たわっている“死んだ世界戦線”の構
成員。だが、コイツらはすぐに生き返る。そういう
ルールだからだ。

しかし“死んだ世界戦線”はもうすぐ終わる。

“死んだ世界戦線”のリーダー！　ゆりを捕まえたか

らだ。

コイツに引導を渡す。

そうすればこの世界の秩序は、直井文人の物になる。何故ならこの力に対抗できる力は無い。

ゆりを失えば、“戦線”の雑魚は雑魚でしかない。ゆりを頼って集まってきた烏合の衆に文人の力に対応できる奴さえないだろう。

最大の問題であった生徒会長にして天使——立華かなでは、生徒会長を失脚した。

何の役にも立たないはずの“死んだ世界戦線”の連中のお陰で手間が省けた。

もつともつと凌辱してからそれをネタにかなでを失脚させるつもりだったが嫌がらせのような真似の方が効果的だったとは。

雑魚には雑魚として使い途があるのだ、と文人は理解した。

かなで自身を捕らえている。万が一物理的に干渉してきた場合に厄介だから。だが、その場合でも最悪催眠術を使えば制御はできる。

もうこれで終わりなのだ。そう確信し、文人はゆりへの催眠術を完成させる。

寸前——

「ダメだあぁっ！ そんなまがいものの記憶で消すな——————！」

生徒がひとり飛び込んできた。

そして、自分を殴った。

ゆりを助けるためだったのだろうか。

だが、男子生徒——音無結弦は泣きながら自分に訴えかけた。

「お前の人生だって本物だったはずだろっ！」

その瞬間。

文人の中に満たされなかった自分の心が広がっていった。

……やっと自分が何故こんなことに傾倒していったか思い出した。

いや、分かっていた苦なのにここまで来てしまったのだ。

「死んだのは兄ではなく、やはり自分だったんだ」

自分の中にそう声が響く。

これは自分の声だ。

これも分かっていたことだ。

……文人でもなく、兄の健人でもなく、誰でもない。その誰でもないことを否定するためだけに、神を目指していた。

分かっていた苦なのに。

もう自分は消えるしか……無い。

前だけだよ」

「俺が抱いているのはお前だ……お前以外いない、お前だけだよ」

彼は何を言っているのだろうか。

だが、自分の目から流れる涙は何だろう。

文人は思う。

——ここにいていいのだろうか。

何のためにこういうことをしてきたのか。

やっと文人は納得ができた。

ただ、認められたかった。

そのためだけに多くの者を傷付けた。

自分が何と小さく、自分を抱いているこの男は何と大きいのか。

文人は近くに立つかなでを見た。

かなでの催眠を解こう。その催眠が解ければ何もかも消える。

今までの悪い記憶は全て。

それは自分だけが持つていけばいい。

もうかなでを束縛する必要はない。

ここに理由は別にできた。

ただ、それがいつ叶えられるのか。

それはもう少し先にならないと分からないけれど……。

でも、今は……こうやって抱かれているだけで気持ちがいい。

その気持ちよさの中で文人は身体にも何か変化が起こっていると気付いた。その変化は懐かしく、そして恥ずかしいことだった。

暴力に頼り、凌辱に頼ったのに……ただこうやって認めて貰って、抱きしめられるだけで。

文人は喜んでた。だから、すぐにかなでを解放することにした。

「かなでさん、あなたに言うておきます——」ロックは死んだ。」

文人なりの謝罪だった。

ただこの世界では今思っていることだけが真実だ。だったら自分が作り出した物は無くてもいいじゃないか。

今の現実、文人の現実には音無の腕の中にある。

【 E N D 】



■ 奥付 ■

発行：GRAND†CROSS

著者：八叉かがみ

イラスト：えーたろー

URL：<http://grand-cross.web2.jp/>

発行日：2010/8/15

印刷：（有）金沢印刷

An illustration in a soft, painterly style showing a hand with light skin tones gently holding a breast. The hand is positioned in the center, with fingers slightly curled. The breast is light-skinned and appears to be wearing a white bra with a red bow. The background is a dark, gradient brown, creating a moody and intimate atmosphere.

Grand i Cross

FOR ADULT ONLY